

了承2

~りょうしょう その2~



FOR ADULT ONLY

Ryousyoud
~丁未2~



まえがき&ごあいさつ

「ゆ、祐一さん…こんな格好は…恥ずかしいです…」

◇皆さんこんにちは&はじめまして。和泉弥生です。今回で通算11冊目、オフセでは4冊目のKanon本は前回に続いて秋子さんの成人向けになりました。相変わらず秋子さんに弄ばれる祐一なのですが、秋子さんに加え…今度は名雪も一緒になって祐一を弄ぶと妄想全開の内容になってしまいました。

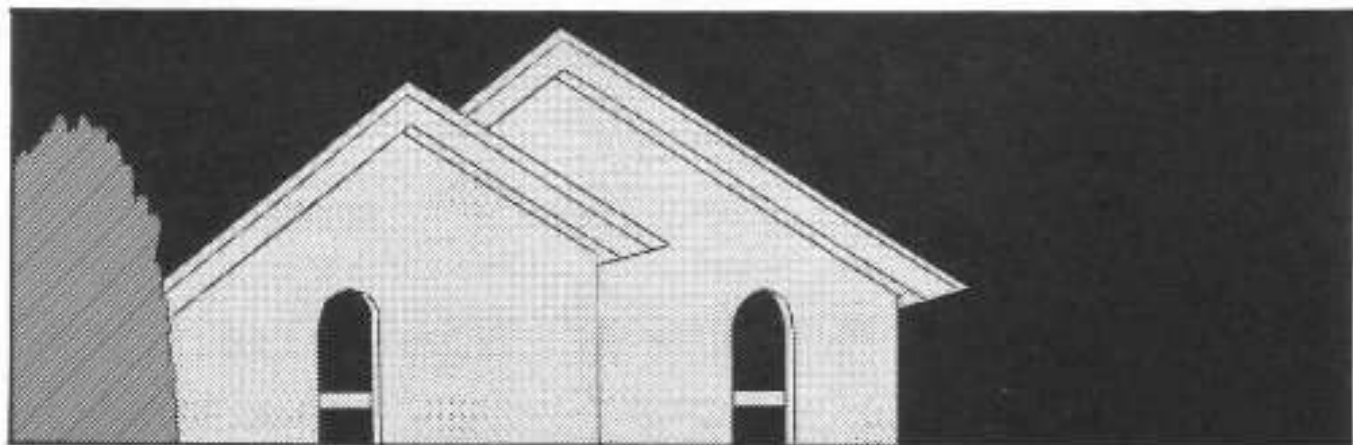
◇それと、即売会で無料配布していたペーパーにおまけで書いていたSSにイラストをつけて収録と廃品利用というかエコロジーな(核爆)一冊となりました。

◇と言う事で前書はこの辺にして本編のほうを楽しんでもらえると幸いです。

和泉弥生

◇祐一に強要されてスカートをたくし上げる秋子さんです。それにしても…スカートをたくし上げるのは描いてて楽しいです(笑)





いよいよ祐一♥

了承♥
いっほい魅、
くたさいね



秋子と名雪の
ふたりで
尽くしておけちゃう

うらら…
祐一さんのおちんちん…
ビクビクいってますわ♥

あふらう…早くう…
祐一の熱いミルクを
ちようたあ〜い♥





お母さんのお顔...
綺麗にしてあげるね



本世...
毎口あなた
射撃してあげるね

うふう...
こんなに
いっぱいいい...



うふう...
おかし...

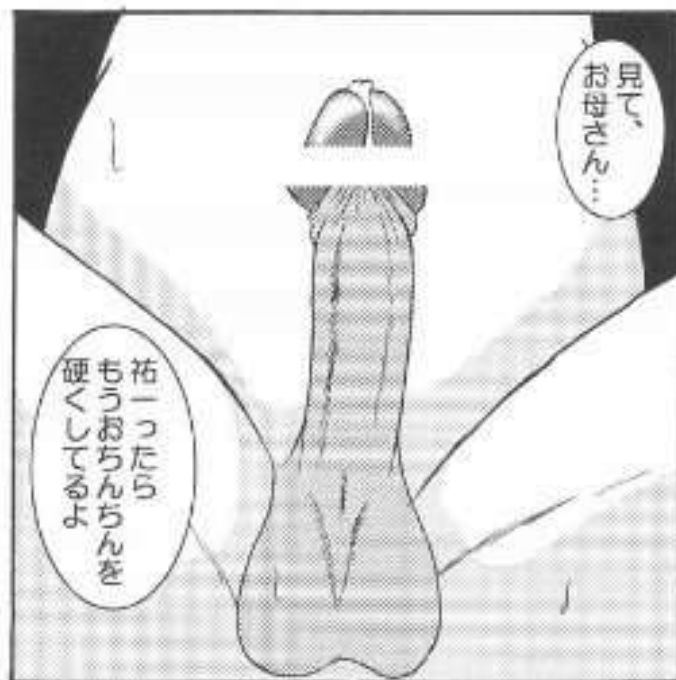


あらあら...
私さ...

やあん♥
祐一の精液で
体中べとべとお...



ん...



見て、お母さん…

祐一ったらもうおちんちんを硬くしてるよ



あっ…

れろっ



あはあっ♡

ああん… ゆ…祐一さんが… おちんちんが奥まではいっていくの♡



私達が精液を認めあつてるのを見て興奮したみたい

あらあら… えっちな子ね



うふふ… 今日私からでした♡

うん…いいよ お母さん



じゃあ…お先に祐一さんのおちんちんをいただきますわね



うふふ、見えますか...
祐一さんのおちんちん...
全部はいっちゃいました

さあ...祐一さんち動いて...
秋子を気持ちよくして...
くださいね♥

あっあひい...
ちっとお...ちっと
秋子のおまんこを
突き上げてスー

グッ
ズチュ
その調子ですわ
祐一さん

ズチュ
ズチュ
グッ
グッ

おっ奥まで
届くのお...

ズチュ

あっああ!

あふこー

ぐちゅっ

グッ
グッ
グッ

ズニユ





あ…ああ

祐一も激しくお母さんを突き上げてよ



ほらっ…後がつかえてるんだからさっさとイッてよ

そ…そんな…いやあ…



こっやって…おちんちんと一緒に腰を揺られるとたまらないんでしょ

ああっ!



も…もうらめえ!

ビッ
グッ

いい…いい…いい…いい…いい…



あ…ああんっ…そ…そんな祐一さん…はっ激しすぎますわ!

ズチゅ

ズチゅ

ひっひい!

グキゅ



ハア

とさっ

うふふ…お母さんったらそんなにお尻がよかったのかしら

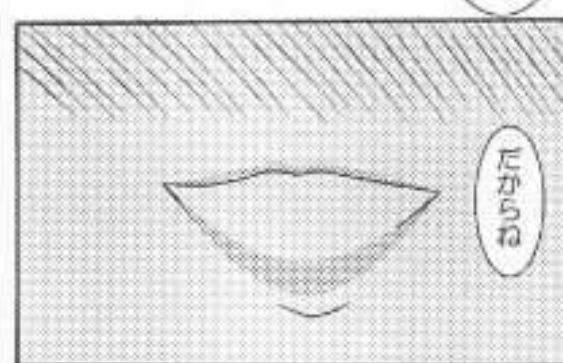
ハア



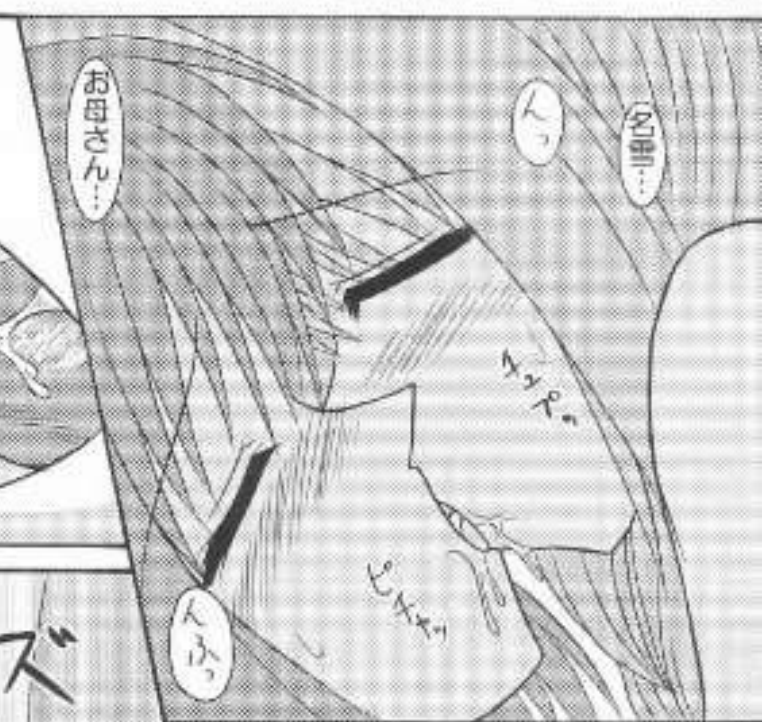




そんなに激しくクリトリスを舐めないでえ！









作品解説

○秋子と名雪のふたりで尽くしてあげちゃう

本当は春のコミレヴォに向けて描いた作品だったのですが、間に合わずにレヴォで出したコピー誌に今回最後の4ページを追加して完成という事になりました。やはり二人いっぺんというのは描いていて難しかったですね。描き終えた後に反省する事が多数ありました。まあ、描く分には楽しいのでこの経験を次に生かしたいです。

それにしても…話も何も関係なく祐一がいき秋子さんと名雪に犯されるといふかなり自分の妄想前回の話になってしまっておりますが…実は祐一がどうして秋子さん達に弄ばれる事になったのかとも考えていたりするので次回はそこらへんを描いてみたいなあと思っています。

○あちちな海の物語

これは、3月のサンクリで無料配布したペーパーにおまけで書いた成人向けのSSです。秋子さんと祐一に海辺でいろいろエッチな事をされるといふないようにイラストをつけておおくりしました。今回は入稿日に余裕があったのでせかっくだから収録する事にしました。これからもこういう突発的なSSとか書いていきたいです…大体は即売会に新刊が出せないときに最後の手段的にやってしまうのですが(核爆)



あちちな海の物語

1

「祐一さん…お待たせしました」

砂浜にしかれたシートに寝そべっていた俺に後から呼ぶ声がした。俺はゆっくりと後ろを振り向いた。そして声の主に「」りと微笑んだ。

「遅かったじゃないですか…秋子さん」

「すみません。久しぶりの水着だったのでちょっと着替えに戸惑ってしまって」

俺の目の前には水着姿の秋子さんが立っている。下着と変らない面積の布地しか身に付けていないためか少し恥ずかしそうにうつむいている。

「別に怒ってないから謝らなくてもいいですよ。で、どうですか？久しぶりの水着は」

俺は立ち上がり秋子さんに近づくと

「うふふ…そうですね。久しぶりの海ですから年甲斐もなくちょっと大胆な水着を選んでみだんですけど…やっぱり恥ずかしいですね」

「年だなんてそんな…秋子さんは今のままでも十分魅力的ですよ」

「うふふ…ありがとうございます。お世辞でも嬉しいですよ」

「お世辞なんかじゃないですよ。ほら、それを証拠に…さっきから周りの野郎達の視線が秋子さんに釘付けになってますよ」

そう言うと、俺は秋子さんの腰に手を回し、ぐいっと秋子さんを引き寄せる。俺の胸板で秋子さんの豊満な胸がぶにっとな押しつぶされる。

「あっ…ゆ、祐一さん…やめてください。困惑した表情で俺を見つめる秋子さん…そんな顔をされるともっとも悪戯したくなってくる。」

「だってねえ…こんなに美味しそうな胸を見せ付けられたら、健全な男の子だったら触りたくなくても仕方がないですよ」

俺は水着の上から秋子さんの胸を鷲掴みにする。手のひらに柔らかい感触が広がっていく。

「それにお尻だって…こんなにいやらしく自己主張していてもう…」

余っていたもう片方の手をお尻に這わせる。水着の布地の中に指を滑り込ませお尻の割目をなぞるように撫でまわす。

「ゆ、祐一さん…そ、それ以上は本道のため

めです」

秋子さんは俺の手を振りほどこうとする。そんな秋子さんにお構い無しに胸をもみ続ける。秋子さんの大きく柔らかい胸が手のひらの中で形を変える。

「大丈夫ですよ…秋子さんが変な声を出さなければ恋人同士がじゃれあってるようにしか見えませんよ…」

「で、でも…こんな恥ずかしい」

口ではそう言ってるものの俺の手に添えられた手の力が見るとぬけていくのがわかる。俺は更に追い撃ちの一言をかける。

「それに…秋子さんだっていつもはこうすれば喜んで体を擦りよせてくるじゃないですか。」

「そんな…喜んでなんて…いません…あ、やあ…そんなに強くされたら…」

「ふふ…体のほうは正直ですよ。せっかく海に2人っきりで来たんですから秋子さんもいつものように楽しんでらどうですか」

「で、でも…あっ、はあ…ゆ、祐一さん…乳首は…ああん…いい、いいっ」

もはや秋子さんは俺の体にもたれかかりその胸やお尻はなすがままになっていた。

「」には…俺達の間を知らぬ奴な

んて誰もいないんですから大丈夫ですよ」
そう耳元で囁くと俺はシートの上に腰をかけた。

「おっ、秋子…」

俺が優しく言っていると秋子さんは困った顔で…しかしこれから起こる事を期待しているかのように瞳を潤ませてゆっくりと俺の膝の上に腰を下ろしていった…

2

びちゅう…ちゅぶっ…ちゅぶっ

「あっ、あひい…だ、だめえ」

海辺にくぐもった声と淫水を掻き分ける水音が静かに響き渡る。俺は秋子さんの水着の中に手を滑り込ませ胸と秘所をじかに愛撫している。秋子さんは周りに気付かれるの恐れてか必死に声ができるの抑えているが感じるツボを心得た俺の指が秋子さんの弱い所を擦り上げるたびに我慢できずに悩ましの声を洩らしてしまう。

「秋子さんのここ…まだちょっとしか触っていないのに俺の指をすぶすぶと飲み込んでいきますよ」

俺は秋子さんにそう囁きかけると秋子さ

んのおまのこの中に埋没させた指を水音が聞こえるくらいに激しくかき回す。

「や、やあ…そんなに激しく描きまわさないでえ…あっ…すこいいい…そこ…いいい…」

「ほら…そんなに大きな声を出してたらまわりの人たちに聞こえますよ」

そう言いながらも俺は秋子さんへの愛撫をいっこうに緩めない。

「そ、そんなのだめえ…あっ…で、でも…あひい…」

秋子さんは手で顔を覆って恥ずかしそうにうつむくが体のほうは更なる快楽を貪ろうと腰を浮かせて俺の指を奥まで飲み込もうとする。

「あれ…秋子さん…向こうのカップル…なんかこっちの方を見てひそひそ言ってますよ…あっちの子供達も不思議そうな顔してこっちを指差してますよ」

俺は秋子さんをからかうつもりでぼそりとそう耳打ちする。もちろん口からのでまかせだったのだが快楽の海に溺れかけている秋子さんにはその言葉だけで効果は十分だった。

「いやあ…だめえ…見ないでえ…」
「秋子さんがそんな悩ましの声を上げなければいいんですよ」

「で…でも…だ…だって…はひい…よ…よすぎて…こ…声が漏れちゃうのお…」

秋子さんはお構い無しに嬌声を上げる。このままだと本当に周りの人たちに気付かれかねない…

「仕方がないですねえ」
俺は秋子さんに見えるように舌を差し出す。

「はあん…ゆ…祐一さあん」
秋子さんは躊躇せずに唇を重ねる

ん…んん…
俺の舌が秋子さんの口内を舐めまわすと秋子さんも舌を絡ませてくる。

ん…びちゃ…びちゃ…んん…
秋子さんが喉を喘らして混ざり合うお互いの唾液を飲み下していく。もちろんキスしている間も俺の指は秋子さんの肉壁をえぐり、固くなった乳首を指で乱暴に押しつぶす。

「ん…んん…」
秋子さんは声を出さずまいとこぼれる唾液もお構い無しに必死に俺の下を責める。俺は更に秋子さんの剥き出しになった肉芽を指と指ではさみこむように強くすりつぶす。

「んん…んんん…」

「んん…んんん…」

秋子さんの体が弓なりに「ククッ」と痙攣する。俺はゆっくりと俺を離すと秋子さんの中から指を引き抜く。

「ゆ…祐一さん」

ぼうっとした表情で俺の顔を見つめる秋子さん…

「秋子さん…俺もそろそろ我慢できなくなってきました」

秋子さんの手を俺の股間を導く。

「あ…」

秋子さんは恥ずかしそうな顔をするが硬く膨張した俺のものを握ったまま離さない。

「あっちの岩陰に行きませんか…あそこなら人気も少なそうですよ」

秋子さんは無言でこくりと頷いた。

3

岩陰につくと俺は海パンを脱いで反り返ったものを秋子さんに見せる。

「あっ…祐一さんの…す…いい…」

秋子さんは恍惚とした表情で俺のもの…いままで数え切れないくらい秋子さんを貫いてきたもの…を見つめる。秋子さんは俺の股間に顔を近づけるといとおしそうに俺の

ちんぽに舌を這わせ出した。

「はむう…祐一さんのおち〇ちん…潮の味がしますう…ちゅば…」

舌をカリの部分に絡ませながら口の中に俺のちんぽを啜える。

ちゅぶ…ちゅば…

んん…じゅぶ…

秋子さんの顔が俺の股間で激しく上下に揺れる。見え隠れする俺のちんぽは秋子さんの唾液で黒く照り輝いていた。

「あ…秋子さん…いいですよ…もっと裏の方にも舌を這わせてください」

「ちゅぶ…あむ…ひゃい…ん…ちゅぶ…れろ…」

秋子さんの舌が俺の裏筋をなぞるたびに下半身から脳髓に向かって電流が走るような快感に襲われる。普段ならこのまま秋子さんのお口の中にたっぴりと精液を出すのだが、いくら人気がないとはいえここは海だ…いつ誰が来るか分からない。俺はフェラに夢中になっている秋子さんをゆっくりと引き離した…

「っ…ゆ、祐一さん…」

秋子さんは口奉仕を途中でやめさせられた形になったので少し不満そうな声で俺を

見上げる。

「どうしましたか祐一さん…私のお口…だめですか」

秋子さんが今にも泣きそうな顔で俺にすがりついてくる…

「いえ…その逆で…このままだとよすぎ

て秋子さんの口だけでいっちゃいそうだから…場所が場所だし二人で気持ちよくなっただほうがいいでしょう」

俺は秋子さんの髪を優しく撫でる

「祐一さん…分かりました」

秋子さんもニコリと微笑み返してくれる。

「それじゃあ…俺は横になってるんで秋子さんの好きなように動いていいですよ」

そう言うと俺は横になる。

「え…でも」

いったん夢心地から少し覚めたかたちになってしまった秋子さんは白昼に青空の下で俺にまたがるのは恥ずかしいのか実を強張らせる。

「秋子さんどうしたんですか…気が乗らないんだったらやめますか」

俺はゆっくりと立ち上がろうとする。

「そ…そんな…いまやめられたら…私…おかしくなっちゃおう」



あ、

アハハハ

ん、うん、うん

アハハ

「だったら…研の」

少し口調を強めて言うと秋子さんはゆっくりと俺にまたがり俺のものに手を添えて自分の中に導いていく…

じゅぶ…じゅぶぶぶ…

「はあん…祐一さんのが私の中に入ってくるのお…」

秋子さんのおま〇こが俺のものをゆっくりと飲み込んでいく。

「あふう…全部入ったのお…」

俺のものがすべて埋没すると俺のちんぼの硬さを楽しむかのように腰をくねらせる秋子さん…

「それじゃあ誰が来るか分からないからさっさといっちゃいましょう」

そう言うと俺は下から秋子さんを突き上げる。

「あひい…そ…そんな…いきなり…は…激しすぎ…」

そう言いながらも秋子さんは俺の腰の動きに合わせて自分の腰を激しく腰を振る。

秋子さんの豊満な胸が激しく上下に揺れる。

「んあ、いいっ…いいのお…もっとお…もっと突き上げてえ…」

秋子さんの肉壁が俺のものをきゆうきゆうと締め付ける。

「秋子さんも…動きが激しいですよ。そんなに俺のちんぼがいいんですか」

「あはあ…いいのお…祐一さんのおちんちんがすくいいのお…」

俺は更に深く打ち込もうと秋子さんの両腕をつかみ腰の動きを合わせる。あたりに肉と肉がぶつかり合う淫らな音が響き渡る。

「はひい…そ…それいいのお…奥まで…奥までおち〇ちんがとどくのお…あ…秋子お…変になっちゃおう…」

秋子さんの締め付けが急に強くなってくる。さっきまで浜辺で散々俺に弄り倒されたせいか絶頂が近いのだろう…俺のちんぼをうごめく肉壁が熱く絡んでいく。

「秋子さん…俺がイク前にイッたら今夜はお預けですよ」

俺は意地悪く秋子さんにそう宣告する。

「そ…そんなあ…わ…私もう…はあん…が…がまんできないい…」

秋子さんがたまらないといった顔でこっちを見下ろす。

「だったらもっと腰を使って俺の精液を搾り取ってくださいな」

「は…はひい…」

秋子さんはもう一心不乱に上下左右にお尻を振っておれのペニスに刺激を与える。本当に限界に近いのか淫壁も俺のモノがちぎれそうなくらいに締め付けてくる…俺の下半身に激しい射精感がこみ上げてくる。

「いいですよ…その調子ですよ秋子さん」

「やあ…は…はやくいってえ…あ…秋子も…頭が真っ白になってえ…も…もうらめえ…」

秋子さんが叫ぶと同時に俺も限界が近づいてくる…

「くっ…それじゃあだしますよ秋子さん」

「は…はひい…ゆ…祐一さんの精液…いいっぱいくださいい…」

秋子さんがそういう終わらないうちに俺は限界を超えて秋子さんの中に精液を放出する。

「あひい…わ…私も…イ…イキますう…」

秋子さんも絶頂を迎える。びくりと大きく痙攣するとぐったりと俺の上にもたれかかってくる。

「は…はあ…私の中に祐一さんの熱いものが…流れてくるのお…」

俺の上で秋子さんは恍惚とした表情を浮かべて終わった後の余韻に浸っていた…



あっ♡

いいっ

アッ
アッ
アッ

アッ
アッ
アッ

「どうですか…青空の下であんな事をした感想は…」

帰りの電車の中…俺は秋子さんにだけ聞こえるように耳打ちする…

「すく恥ずかしかったですよ」

顔を真っ赤にして答える秋子さん。

「でも秋子さんもあんなに乱れて…これが癖になっちゃったら俺の体もたないかも…」

「もう…祐一さんのいじわる…」

「でも…秋子さんの水着姿…また見てみたいなあ…」

「祐一さん…そんなエッチな目で言われると困りますよ」

「どうですか秋子さん。今度はこんな日帰りじゃなくて南の島に1週間くらい行きませんか？」

秋子さんの非難の目を無視してそう続ける。

「うふふ…いいですね。」

秋子さんもニコリと微笑み返してくれる。

「もちろん…今度も二人っきりですよ…」
「そう言っと秋子さんはさっきまでの事を

思い出したのか更に顔を赤くしたが…

「うふふ…了承」

一言そう言うと俺にびたりと体を寄せてくる…ワンピース越しに大きな胸の感触が伝わってくる。そして潤んだ瞳で俺の瞳を見つめて…ゆっくりとその瞳を閉じる。

「あ…秋子さん…」

俺がたじたじしてるのをチラッと見ると

「あらあら…さっきまであんなに積極的だったのに…」

と一言いうとぶいっと拗ねたように顔を背けてしまう…俺は慌てて秋子さんの肩を抱いてこっちを向かせる…そしてその唇に自分の唇を重ねた…

…END

あとがき

「あっ！ いやっ、早く…
スイッチを止めてください！」

最後までお付き合いいただきありがとうございました。前回に引き続いて秋子さんのエッチな漫画をおおくりいたしました。漫画のほうは祐一が秋子さんに攻められてSSの方は祐一が秋子さんを攻めてと実は結構一粒で二度おいしい内容になっているのではと想ったりしました(核爆)

それにしても…話も何も全ページ裸だけの内容になってしまいました…「Kanonは関係ないでしょ〜！」と蒼天の人に怒られてしまいそうです(笑)次回以降はちゃんとお話のほうも組み立てていこうと思います。

それでもやはり全ページエロシーンの漫画というのも結構疲れますね。ページ構成、レイアウト…そして画力とすべてにおいて力不足を痛感してしまいました。絵を描く事は好きなのですがしがしと精進していくしかないですね。

それにしても前回は秋子さんの看護婦モノ、今回は秋子さんと名雪の母娘ドンブリモノ…次はどうなるのでしょうか。秋子さんぶるまあモノとかスク水モノとかどうしようもないことばかり頭に浮かんできますがまだまだ描きたい事がいっぱいあるのでよろじかったらお付き合いいただけると嬉しいです。

それでは今回はこの辺で失礼したいと思います。最後になりましたがこの本を手にとってくれた皆様、最後までお付き合いいただきありがとうございました。

和泉弥生

○前書のスカーツたくし上げ秋子さんを更にパワーアップさせて祐一の命令でおもちゃをいれたまま一日を過ごすことになってしまった秋子さんです。いまは確認のために自らスカーツを上げて中を祐一にじっくりと見られています。もちろんリモコンは祐一が…げふっ、妄想が全開になってしまいました(核爆)



Kanon Fan Book Vol. 10

Akiko Minase

Nayuki Minase



Presented by
きれいなおねえさん